

医療者間で使われるドイツ語隠語の造語法に関する考察

江藤裕之*¹，岸利江子*¹，岩崎朗子*¹，坂本ちより*¹，頭川典子*¹，
青木三恵子*¹，久保田智恵*¹，杉浦絹子*¹，八尋道子*¹

【要 旨】 医療職者間の専門用語や隠語には外国語からの借用語，造語が多いことはよく知られる．特に，ドイツ語起源の隠語が使われることが多く，会話内容の秘密保持という点に一役買っている．しかし，頻繁に使われる隠語であっても，中には借用した語の原形をとどめていないものも多く，また，その起源がドイツ語であるとの認識がなされていない語も多く存在する．

本稿では，日本における医療職者間で使われるドイツ語隠語研究の第一段階として，いくつかの隠語を取り上げ，それがどのような起源を持ち，またいかなる形で今日の日本の病院内で使われているのかを概観し，医療職者間ドイツ語隠語の特徴を造語法という点からまとめてみた．情報開示が問題になる今日の医療・看護の現場で，第三者には理解不能な語がどのような形で扱われ，また今後どのように扱われるべきなのか．このような問題意識を踏まえ，今後の研究の出発点としたい．

【キーワード】 医療職者間で使われるドイツ語起源隠語，借用語，造語法，語彙論

はじめに

我々が何気なく使っている日常語には，意外にドイツ語が入り込んでいる．「彼はエネルギーだ」などというが，この場合の「エネルギー」はドイツ語から日本語に入った借用語で，英語からの借用であれば「エナジティック」となるはずである．「ビタミン」，「ワクチン」，「ウィルス」，「ゲレンデ」，「ルンペン」，「アルバイト」など，英語からではなく，ドイツ語起源・経由の借用語は日本語に少なくない．

明治維新と共に文明開化の波に洗われた日本は，社会制度，軍事，科学などの分野でそれぞれ当時の最高レベルと思われていた国からその最高の成果を取り入れた．交通，郵便，海軍はイギリスに，陸軍は当時の最強陸軍国フランスを破ったドイツから，また医学，化学を初めとする自然科学（人文学も含め学問一般）も，ベルリン大学に代表される大学改革の結果，当時最高の学問レベルを誇ったドイツから取り入れた．

明治政府は，当初，戊辰戦争で官軍（特に薩摩藩）の傷病兵を救護し，それまでの東洋医学に対して西洋医学の絶大なる即効性を知らしめたイギリス公使館付医員 William Willis（1837-94）率いるイギリス医学を正式に導入する予定であった．事実，Willisは東京医学校の教授に就任，クロロホルム麻酔，外科消毒法，四肢切断術，女性看護人の採用などイギリス流の医学教育を行った．しかし，明治政府は，当時科学分野において抜群の成果をあげていた新興国ドイツの医学に転換し，Willisは中央を追われ，明治二年に設立された薩摩藩の鹿児島（島津）医学校へ初代校長として赴任，西南戦争までその職にあった．Willisはこの地で多くの日本人医学生を育て，鹿児島医学校は鹿児島大学医学部の前身となる．

イギリス医学から，ドイツ医学への転向は，藩閥・学閥闘争もその理由として考えられるが，純学問的には臨床に重きを置いたイギリス医学に対して，細菌学に代表されるように徹底的に原因（原理）を追い求め，

*¹ 長野県看護大学
2001年12月13日受付

科学的に病理を追求するドイツ医学の姿勢に当時の新興日本の科学者が惹かれたのであろう。いずれにせよ、明治以降の日本の科学(学問)界におけるドイツ語の威力は多大なもので、特に医学においてはそれが顕著であった。その名残か、戦後、アメリカ医学の影響で英語(米語)がより頻繁に使われるようになった今日の日本の医学界でも、ドイツ語らしい響きを持つ隠語が数多く残されている。

本稿では、日本の医療職者の間で使われるドイツ語隠語研究の第一段階として、いくつかの隠語を取り上げ、その起源と、いかなる形で今日の日本の病院・保健所内で使われているかを概観し、医療職者間ドイツ語隠語の特徴を造語法という観点からまとめてみたい。

医療職者間ドイツ語隠語の語源・起源と その造語法における特徴

1. 医療職者間ドイツ語隠語

「カルテ」「オペ」「クランケ」などの語が日本の病院で普通に使われていることは特に病院関係者でなくとも知っている。これらの語は日本語や漢語に由来するのではなく、外来語、特にドイツ語起源の語であることも知られている。もちろん、この類の語が必ずしもすべてドイツ語起源というわけではなく、それ以前のオランダ医学の影響(例えば、「メス」など)や、ラテン語、フランス語に由来するものや、そして最近では英語(米語)からのものが多い。中には、日本語表現を縮めたもの(例えば、「キンチュウ(筋肉注射)」「ジョウチュウ(静脈注射)」「ゼンマ(全身麻酔)」など)や外国語と日本語の一部分を組み合わせたもの(「オペ患(手術患者)」など)もある。このような外来語は病院内で「隠語(jargon, argot: 仲間内のみで通用する特別な言葉)」の役割をしている。

もちろん、こういった隠語はどのような集団、組織にもある。主な理由は、部外者を内部者どうしのコミュニケーションから排除したり、あるいは部外者に会話の内容を理解されないようにする配慮が考えられる。特に、医療職者間の隠語は患者やその家族に聞かれ、理解されては困る内容を、「医学の素養がない」と思われる患者に理解不能の言葉で作られてきた。

この排他性の裏側には、医療職に携わる自己のアイデンティティーを確認することや、先輩から後輩へと隠語が伝えられることから帰属意識を深め、またその医療機関コミュニティ内の仲間意識や連帯感を強める目的もある。また、このような「業界用語」には、シロウトとは隔絶されたある種の優越性を感じさせることもあり、また外国語を使うことで何か格調高い響きも感じられ、それが使用者の気持ちを満足させ、また魅力となる。さらに、実用的意味として、カタカナ標記で済むので、記載も簡単だという点がある。

外国語を、ほぼそのままの形で日本語の音韻体系に合うように変えて使用するのとは、一般的にはその語の概念を表わす日本語がない、あるいは翻訳不可能、ないしは新語が次々に導入されて翻訳する時間がないなどといったことが主な理由である。しかし、医療職者間の隠語の場合は、むしろ上述したように排他性、秘密保持性の理由によるものが多いと思われる。

医療職者間の隠語の多くが何となく日本語ではないことに気がついていても、それをはっきりとドイツ語起源だと認識するのは容易ではない。病院関係者や医学生が「食事に行く」というのを「エッセンに行く」と言っても、このEssenはドイツ語の基本語なので多少ドイツ語を勉強したものであれば容易に理解でき、またドイツ語を知らずとも語の響きから「ドイツ語らしい」と感じられる。しかし、アナムネ、ムンテラ、エントとなるとドイツ語に通じていても何のことも理解は難しい。

医療職者間の隠語は、「病名」「診断、療法、処置法、対処法」「器材」「病理学」「医療スタッフ、診療科」等のカテゴリーに分けることができる。本稿では、公表されている詳細な医療職者間隠語リスト(富岡,1996; 信州食文化研究会,1999)の中から、専門的な医療活動領域に入る隠語は避け、

1) 看護の場で日常的に使われ、マスメディアを通して比較的一般に普及していると思われる語

2) その語の語源に医療文化の変遷が色濃く示され、また日本に輸入された経緯が興味深い語

という基準で、臨床経験のある複数の共著者間でコンセンサスを得ながら分析する語を選定した。見出し語は次の通りである。

1) 日常的な意味を持つ隠語:

アナムネ, エント, オーベン(ネーベン, チューベン, ノイエ), オーバー, カイザー(アウス, ゲブルト], ベッケン), ステル, ムンテラ

2) 診療科を表す隠語:

アウゲ, ウロ, オルト, ギネ, デルマ, プシコ, ヘルツ, キント

2. 医療職者間ドイツ語隠語の語源

それでは、上に挙げた見出し語について、その語源、造語法を個別に見ていくことにする。なお、ドイツ語の語義は『小学館独和大辞典』(国松, 2000)を、語源については Kluge のドイツ語語源辞書(201967; 231995: 版の相違については Eto (1999) 参照), Klein の英語語源辞典(1971), 印欧語根については Pokorny(1959) を参照した。

アナムネ

入院したばかりの患者にインタビューをして、看護のための情報を得ることを「アナムネ」と言う。「入院患者さんのアナムネをとります」のように病棟内では普通に使う語で、「既往歴, 病歴」を意味するドイツ語 Anamnese の最初の二音節から作った省略語である。

これは元来ギリシア語起源の語であるので、必ずしもドイツ語隠語とは言いにくい。ギリシア語

は英語では an-am-ne-sis/ænæmni:səs/, ドイツ語では Ana-mne-se /anamné:sə/ となり、英独語とも意味は、「(1) 追憶, 回想, 記憶力; (哲学) 想起, アナムネーシス; (2) (医) 既往症, 既往歴, 病歴; (3) (宗) 記念唱」と共通である。しかし、「アナムニ」ではなく、「アナムネ」と発音することから、これはドイツ語を経由して日本語に入ってきた語と考えてよい。

ギリシア語 の意味は a calling to mind, reminiscence で、接頭辞 ana- と語幹 mnesis に分けられる。接頭辞 ana- () はいくつかの意味があるが、代表的なものとして、1) up, upward 2) back, backward, against 3) again, anew 4) exceedingly 5) according to がある。例えば、analysis (= loose up) の ana- は 1) の意味であり、analogy (=

according to logos) の ana- は 5) の意味で使われている。 の ana- は 2) back の意味である。

mnesis は現代英語では、語幹 mnesia (記憶) として使われる。amnesia (記憶喪失: 接頭辞 a- = 無) や paramnesia (記憶錯誤: 接頭辞 para- = 不整) などの語がある。さらに、mnesis を遡ると think, remember の意味の印欧語根 *men- (* は文献上確認不可であるも音韻法則的に類推可能な語形を示す) にまで至るが、この語からの派生語として英語だけでも、mind, mental, admonish, amentia, amnesty, comment, demonstrate, man, mania, mention, monitor などの語がある。

上の定義にもあるように、ドイツ語 Anamnese, 英語 anamnesis にはプラトン哲学の「想起(アナムネーシス)」の意味もある。「魂が身体と結合する前に知っていたアイデアを思い出すこと(すなわち真の知識に達するための「既往歴」のこと)」である。さらに、キリスト教では「記念唱」の意味もあるが、これは「ミサにおける、キリストの受難・復活・昇天を思い出す祈り」のことであり、いずれも「思い出す」と意味的関連がある。これが、ドイツ語や英語の医学用語として、「既往症, 既往歴, 病歴」などの意味で取り入れられた。

「アナムネ」という語は、ドイツ語や英語を多少知っていても、病棟内隠語として使われる際の意味は推測し難い語である。

エント

「あの患者さん, 本日エントです」のように、「退院」という意味で病棟内では非常に頻繁に使われる語である。さらに、「エント診(退院診察)」「エント指導(退院指導)」などの活用法もある。口頭で使用されるのみならず、「ENT」のように連絡ボードや回覧メモに書かれることも多い。この「エント」だが、これは動詞 entlassen (解放する, 退院させる), その名詞形 Entlassung (釈放, 退院) の接頭辞 ent- だけを取ったものである。

ドイツ語接頭辞 ent- は英語の接頭辞 ex-, de-, dis- に近く、「~から離れる」の意味である。ドイツ語初学者でもよく知っている語 entschuldigen は「Schuld (罪) ent- (から離) en (~する)」ということで、「弁

護する, 免責する」の意味になる。また, Max Weber (1864 - 1920) の社会学用語として有名になった「魔術からの解放」は“Entzauberung der Welt”であるが, これは「der Welt (この世の) Zauber (魔術) ent- (から離)-ung (~すること)」という意味で, 人間の頭の中を「近代化」するということである。

このent- は, ドイツ語では元来接頭辞なので, 独立した語として用いるのは文法的に破格である(ent- とは逆の意味の接頭辞auf- を「入院受け入れ (Aufnahm)」の意味では使うことはないようである)。しかし, それはもともと外国語ゆえ, 日本語ではこのような使い方をしても何の違和感もないのであろう。確かに, 「患者がエントラッセンする」のように完全な語を用いるよりは簡便である。また「エント」だけだと何語かもよくわからないので, 辞書で調べることも出来ない。実際, 病院関係者でもドイツ語に馴染みのない人にとっては, あるいは多少ドイツ語の知識があったとしても, この「エント」なる隠語の素性は解りにくい。アルファベットを使っているので, この語(接頭辞)を英語だと思っているナースも多い(英語の「退院」はdischargeであり, 英語系の隠語を使う病院では, ENTの代わりにDISが使われる)。その意味でも, 「エント」は隠語としては完璧である。

オーベン, ネーベン, チューベン, ノイエ

「僕のオーベンは厳しい」「ネーベンの出来が悪い」という場合の「オーベン」「ネーベン」は, それぞれ「指導的立場にある医師」「自分よりも下位の医師(特に当直などの若い医師や, 指導医に受け持たれている研修医)」を意味する。

oben と neben とは対の概念であり, oben が「上, 上位」という意味に対し, neben は「隣, 下, 副」などの意味である。場所的な意味においては, oben の反語として unten があるが, 「横についている」という感じから neben という語を用いるのは適切である。また, neben には「付随的」というニュアンスが強く, Nebenabsicht (裏の意図, 下心), Nebenamt (兼職, 非常勤), Nebenausgabe (特別版, 号外), Nebenjob (アルバイト, 副業) などの接頭辞としても使われる。「ネーベン」は「研修医」の他にも「アルバイト」の

意味で使われることもある)。「副」の意味での neben に対する反意語は一般的に haupt- (主) であるが, 地位の上のものという意味での指導医を指すので oben を使っている。

oben, neben はドイツ語では前置詞, 副詞, ないしは接頭辞として使われ, 単独で名詞として使われることはないので, 「ネーベン」「オーベン」は完全な日本語隠語である。さらに, 「チューベン」なる語があり, これは「オーベン」と「ネーベン」の中間ということで, 「中ベン」なる語が造られた。これは, 「ゴリラ」と「クジラ」を合わせて「ゴジラ」を, breakfast と lunch を合わせて brunch を造る, いわゆる blending (混成) という造語法に似たもので, ドイツ語の一部に日本語を組み合わせる loan blend (借用混成語) であり, ユーモアのある洒落表現となっている。

他にも, 「新人」を意味する「ノイエ」があるが, これはドイツ語形容詞 neu (新しい) の名詞形 Neue (新顔, 新入り, 新酒, 新しいこと) から借用された語である。

オーベー

次に「オーベー」であるが, これは保健婦の間でよく使われる。例えば, 乳幼児健診の際に「出生後すぐに医師から心雑音があることを指摘され, 経過を見るよう指示されていましたが, 3ヶ月健診ではオーベーでした」のように使う。また「基本健診結果O.B.」「前回の健診ではO.B.」のように, 家庭訪問記録等の中で使用することもある。保健婦には保健所勤務と市町村勤務が多いが, その両者の間にはこの隠語の使い方に大きな相違はない。保健婦の中には, 病院勤務ナースとしての臨床経験が豊富な人も多く, そのためか, こういった類の隠語を何かしらのプライドを持って, あるいは確固たるポリシーのもとで使用する人もしばしば見受けられる。

この「オーベー」なる語は, 短縮語でも, 新造語でもなく, れっきとしたドイツ語である。カルテではO.B.と両文字とも大文字で表記されることもあるが, 正確にはo.B.と書く。意味はohne Befund, すなわち「所見なし, 異常なし」である。ohne は英語 without と同じで, また Befund は動詞 befinden (判定する)

の名詞形であり、意味は「調査結果、所見、診断書」である。同じく befinden の不定形名詞 Befinden があるが、これは「健康状態、判定」という意味がある。

o.B. がドイツ語 ohne Befund の頭文字から作った省略形であることを、すべての病院関係者が認識しているかどうか不明であるが、o.B. を「オービー」と発音せずに、「オーペー」と言う限り、少なくとも英語ではないと気づいてはいるはずだ。英語では No problem. (問題なし) や Not in particular. (特記事項無し) となり、実際その略号の N.P. や n.p. が使われることもある。また、英語 normal が使われる現場もある。しかし、o.B. を使えば、その意味を推測することは英語の知識だけでは病院関係者でも難しい。

カイザー、アウス、ゲブルト], ベッケン

次に、産婦人科病棟でよく使われる隠語を挙げてみたい！ベッケンだからカイザーです」と言うことがある。ここでの「ベッケン」とは、Beckenendlage (胎児の骨盤ベッケン位)、すなわち「逆子」のことであり、そのため Kaiserschnitt (帝王切開) が必要との意味である。「カイザー(昔にドイツ語を習った人はカイゼルと発音するだろう)」が「皇帝」の意味であるのは有名なので、これが産婦人科病棟で使われれば何となく意味を推測できる。しかし、「ベッケン」はわからない。いずれにせよ、「胎児が骨盤位ですから、帝王切開を行います」というよりは、「ベッケンでカイザー」と言った方が、言葉に無駄もなくすっきりしていて、専門家どうしには都合がよい。

「Geb開始中です」も意味が取りにくい。産科では、「分娩」のことを「Geb」「ゲブルト」と言う。だから、「Geb開始中」とは、「分娩が始まっている、陣痛室にいる」という意味である。「ゲブルト」なら、ドイツ語の Geburtstag (誕生日) の Geburt (誕生) のことかとドイツ語の初学者にも何となくわかるが、さすがに「Geb」と切られては無理である。ドイツ語に忠実に切れば、Ge-burt (ゲ-ブルト) となる。

さらに、産婦人科関係の人が使う「アウス一回」は、「人工妊娠中絶の経験が一回ある」の意味で、かなりポピュラーである。アウスとはもちろん aus-(外に) のことであり、Auskratung(人工中絶)の接頭辞を取っ

たわけである。このように接頭辞だけを取って独自に使用するの、上述の「エント」や「オーベン」「ネーベン」に似ている。「アウス」だけでは、「外に」の意味は分かったとしても、この隠語の本当の意味は部外者には理解が困難である。患者のプライバシーに関することは隠語を使用するのが秘密保持には一番である。

ステル

「ステル(シュテル)」という語が医療職者間隠語では「亡くなる」を意味するのは部外者にはわからない。これは「死ぬ」を意味するドイツ語 sterben の最初の一音節のみ分離し、日本語として発音しやすいように母音 u を加えて作った隠語である。同族語として英語 starve がある。starve が、「飢える、飢え死にする」という意味に特化されているのに対し、sterben は一般的に「死ぬ」という意味である。st- で始まる多くの語には、stand, stable, still, stay などのように「動かない」という基本イメージ(これは一種の音象徴である)があるので、sterben とは「死んで硬直して動かない」状態のことをいう。

病院内で「号室のさんが亡くなった」だとか、「死んだ」という表現は他の入院患者に聞かせたくはないし、また不吉な表現でもある。したがって、その事実を隠し、あるいは知らせないために「ステた(ステった)」などと言う。それを聞いた他の患者が、「この病院は患者を捨てた」となど誤解してしまったという笑い話もあるくらいだ。

注目すべきは、医療関係者でも、仕事を離れて立ち会う死のことを、「ステった」と言うことはまずない。それは、同じ死であっても、プライベートでの友人、家族など、身近な人の死に立ち会うことと、医療関係者として、仕事上、患者の死を取り扱うことを区別したいという心理が働くからであろう。これは、人間として当然の感情である。

ムンテラ

「ムンテラ」なる語は数ある医療職者間隠語の中でも最高の傑作であろう。この語は Mund (口) と Therapie (療法・治療) の、それぞれの語から最初の一音節と二音節を取って合成した語である。意味は、

敢えて訳すならば、「口述療法」とでもなるが、これは「患者やその家族への口頭による治療法、診断結果の説明」のことである。「今日 時から、 医師により さんへムンテラされます」のように、病棟ではナースが日常的に使う。

「ムンテラ」には、「ナースが患者に説明をする」という用法はあまりなく、医師により患者やその家族に病状の説明などをするときに使われる。その際、ナースは、患者に対しどのように医師から説明がなされ、その時の患者や家族の反応がどうだったかを観察したり、ムンテラの後、ショックを受けている患者を慰めたりするための準備として、医師のムンテラに立ち会うことが多い。ナースから患者への説明は病態説明というよりは、むしろ生活に関する「患者指導」が多いようである。

また、病態の説明など、「ムンテラ」はひとつの「手続き」として特別に行われることが多いので、その分、手術前の術式の説明や、手術後の結果の説明、告知、治療方針など、重大な内容も多い。「アウス」の場合と同様に、「ムンテラを行う」という言葉によってプライバシー保護にも一役買っている。

この「ムンテラ」なる語も、「ムント・セラピー」と完全なドイツ語の形で使用されていれば、多少ドイツ語の知識のある人ならその意味を察することができる。また、ドイツ語を知らなくとも「セラピー」が、英語の「セラピー (therapy)」と同じことくらいは推察できるかもしれない。それでは、隠語の意味がなくなる。Mund と Therapie から、それぞれ Mun と Thera の部分を繋ぎ合わせて「ムンテラ」という新語を作り出しているため、使っている方も、それを耳にする側も、それがドイツ語であるということを感じもしないし、また気にもしていない様子である。

診療科を表す隠語

診療科を表す隠語には、ざっと挙げただけでも、アウゲ (Augenheilkunde: 眼科), ウロ (Urologie: 泌尿器科), オルト (Orthopädie: 整形外科), ギネ (Gynäkologie: 婦人科), デルマ (Dermatologie: 皮膚科), プシコ (Psychose: 精神科), ヘルツ (Herz: 各科の心臓担当), キント (Kind: 小児科) などがある。

これらの語は「アナムネ」の場合と同じように、すべてドイツ語からの造語によるものとは言いにくい。ドイツ語本来語の Auge, Herz, Kind を除くと、残りはすべてヨーロッパ諸語において多くの学問語の由来となるギリシア語起源であり、したがって英語の場合もほぼ同形である。しかし、「ユーロ」ではなく「ウロ」、「オーソ」ではなく「オルト」、「ジャイネ」ではなく「ギネ」、「ダーマ」ではなく「デルマ」、「サイコ」ではなく「プシコ」と発音することで、これらはすべてギリシア語起源の語ではあっても、英語を経由したのではなく、ドイツ語を経由して日本語に取り入れられたと考えられる。

また、眼科を意味する英語 ophthalmology と同形の Ophthalmologie がドイツ語にはあるが、英語の eye doctor と同じく、ドイツ語にも Augenheilkunde があり、ここから「アウゲ (アオゲ)」が来たものと思われる。この Augenheilkunde は語を構成する要素「Augen (目), Heil (癒す), Kunde (学)」がすべてゲルマン系語で、従って Ophthalmologie より「庶民的」な語である。

神経内科のことを医療職者間隠語では「ニューロ」というが、これは上記の例に反してドイツ語を経由しないで日本語隠語になった語であると推測できる。「神経内科, 神経科学」を意味する英語は neurology (ニューロロジー) であるが、ドイツ語では Neurologie (ノイロロジー) である。したがって、神経内科のことを「ノイロ」ではなく、「ニューロ」と言う限りにおいて、これはドイツ語からではなく、英語から、もしくは精神科に多くの影響を及ぼしたフランス語 (neurologie) からの借用と考えられる。

3. 隠語の特徴——造語法に関して

上に挙げた例から見て、ドイツ語から語が借用され日本語の医療職者間隠語として確立する際に、共通した点をいくつか挙げる事ができる。

- 1) 借用前のドイツ語を、そのままの姿、意味、発音で使っている隠語は少ない。何らかの形で語が造られている。その意味で、借用語、外来語というよりは、新造語である。
- 2) 隠語を造語する際に、品詞の転換が行われたり

(前置詞 名詞), 概念を転用したり, 接頭辞のみを使用したり, 合成を行ったりと, ドイツ語本来の使い方に忠実ではない。

3) 語の一部を使って造語する際に, 語本来の morpheme (形態素) 単位, あるいは syllable (音節) 単位で言語学的に見て正しく切り離されているものは少なく, 日本語の音体系に組み込まれやすいように, 恣意的に切られている。

4) ドイツ語をそのまま使用する際も, 発音は完全に日本語化されている。(例えば, McDonalds を「ミクダナルズ」とストレスを置いて発音するのではなく「マクドナルド」と日本語的に平板に発音するのと同様である。)

このように, ドイツ語に起源を持つ医療職者間隠語は日本がドイツより近代医学を学ぶと同時に作られ, 今日もその素性の知れぬ訳のわからない日本語としてはあるが, 病院内では十分にコミュニケーションの道具としての役割を果たしている。

今後の研究課題

今日の医学界を取り巻く状況は, 日本が開国したころの事情とはずいぶん異なっている。特に, 戦後, アメリカ医学の影響が絶大で, 「ドイツ医学 アメリカ医学」の流れのように, 医学専門用語, 医療職者間隠語にも「ドイツ語 英語(米語)」という流れは確かに存在する。

英語中心の病院では, 例えば, アサイメント (assignment: 患者の配分), アテンディング (attending: オーベンにあたる医師), インチャージ (in-charge-nurse: その日のリーダー), ウィック (WIC=Walk in clinic: 当日来), ストゥール (stool: 便), チーレジ (chief resident: 研修医のまとめ役), チャート (chart: 病歴, カルテ), ディスチャージ (discharge: 退院), トランス (trans: 転棟・転科), フットバス (footbath: 足浴), ベッドバス (bedbath: 清拭), ユーリン (urine: 小水), レポート (report: 申し送り), ワード (ward: 病棟) などが一般に用いられる。「ウィック」「チーレジ(チーフレジデントと短くしないで呼ぶこともある)」などの略語を除けば,

これらの語は英語の素養が少しでもあれば, たいいていことは理解できるので, 略語として記載や会話には便利であっても, ドイツ語起源の隠語に比べ秘密保持性はかなり低い。

このような英語の隠語に慣れた病院出身のナースは, ドイツ語起源の隠語に余り親しみが無い。そのため, 英語隠語を使う傾向の強い病院から, ドイツ語隠語を頻繁に使用する他の病院に転職すると, 最初の間, 仕事仲間との会話についていけないことや, あるいはカルテが読めずに困ることがある。一般化できないが, 設備や医療内容の「進んだ」病院(都心部の病院)ほど病院内の「英語化」が進み, その結果ドイツ語の隠語を使わなくなり, 逆に地方の「古風な」病院ほど, その医師やナースの間では根強くドイツ語隠語が残っているようである。また, 地方の「古風な」病院でも, ドクターよりはナースに, ドイツ語起源の医療職者間隠語が根強く残っている印象がある。言い過ぎかもしれないが, 隠語の使い方である程度の「お里」が分かるようである。

また, こういった「ウチワ言葉」は, 学生時代には教科書にある正式な専門用語を尊重するため, 就職した現場で初めて知ることがほとんどである。したがって, 同じ病院内でも, 他の部署で使われている言葉については学生時代や研修時代にはこのような隠語を使用せず, 正式な用語を用いる。隠語は部外者との差別化を計る意味が大きいので, 就職した現場で初めてこのような隠語に接し, それを使えるようになったら一人前という雰囲気がある。

さらに, 病棟内の会話だけではなく, 医療訴訟の際には法的な証拠資料となるカルテや看護記録への記載にも, これらの隠語が使われている。「略語はできるだけ使わない」というのが一般的な方針のようではあるが, 忙しい臨床の場で急いで記録する際に, 記載の面倒な正式な専門用語よりは, 略語, 隠語の類の方が記載は楽である。しかし, 病院や病棟によって隠語の使われ方や意味合いに多少のズレがあり, それゆえに隠語は公的なカルテなどにも使用が許されていないのかどうかという疑問が残る。また, 病院から地域への連絡(症例の引継ぎ)の際にも使われやすいので, 隠語だということを十分に認識していないと, 引き継ぐ先

の保健婦に意味がわからないという問題もある。また、隠語使用の問題は、その意味が一般の人には理解不能なので、今日の医療現場で多くの議論がなされている情報開示などの問題とも合わせて、その使用の是非が論議されなくてはならない。

このように、隠語ひとつとってみても、それが外来語から作られた場合、そこに外国との交流の歴史や、その語にまつわる文化史的要素が見え隠れし、またそれを採用する側の社会的な人間関係をも垣間見ることができ、興味は尽きない。

本稿では、ドイツ語起源の医療職者間隠語で、特に看護の現場でナースに頻繁に使われるものを一部紹介し、その語源や造語法を調べてみた。今後の研究課題として、

- 1) 隠語の収録数を増やしたリストを作成し、それをカテゴリー別に分ける。
- 2) 医療関係者にアンケートをとり、それら隠語の知名度・認知度、使用頻度、語源(ドイツ語であること)の知識の有無などを調査する。さらに、このような隠語使用に関してナースがどのような意見をもっているかを、特に情報開示との関連から調べる。
- 3) その結果を病院間や病棟(診療科)間で比較をする。

を挙げ、医療職者間ドイツ語隠語(さらには隠語全般)に関する資料提供を目指した研究報告を継続して行いたい。

文 献

- Eto H (1996) *Über den Einfluß des Deutschen auf die japanischen Sprache. Mit besonderer Rücksicht auf Lehnwörter und ihren soziologischen Hintergrund.* Unpub. typescript (originally written for the seminar of "German Language in Contact" held in the Fall Semester at Georgetown University 1996)
- Eto H (1999) Review of Friedrich Kluge, *Etmologisches Wörterbuch der deutschen Sprache.* (23rd edition. Berlin/New York: Walter

de Gruyter, 1995) *The Bulletin of the Hermy Sweet Society* 32, 53-59.

Klein E (1971) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language.* Elsevier, Amsterdam.

Kluge F (1967) *Etmologisches Wörterbuch der deutschen Sprache.* 20. Auflage. Bearbeitet von Walther Mitzka. Walter de Gruyter, Berlin.

Kluge F (1995) *Etmologisches Wörterbuch der deutschen Sprache.* 23. Auflage. Bearbeitet von Elmar Seebold. Walter de Gruyter, Berlin.

国松孝二他編(2000) *独和大辞典(第2版)*. 小学館, 東京.

Pokorny J (1959) *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch.* Francke, Bern.

信州食文化研究会(1999.6.22) "医療用語集"

<http://village.infoweb.ne.jp/fwkk8987/index.html>.

富岡謙二(1996.8.21) "カタカナ医学俗語集(救急医療編)"

<http://plaza.umin.ac.jp/GHDNet/98/g821zoku.html>.

【Summary】

A Study of Jargons of German Origin in Japanese Hospitals

Hiroyuki ETO, Rieko KISHI, Akiko IWASAKI, Chiyori SAKAMOTO,
Noriko ZUKAWA, Mieko AOKI, Chie KUBOTA, Kinuko SUGIURA, Michiko YAHIRO,

Nagano College of Nursing

It is well known that many kinds of loanwords from various foreign languages are used as medical terms and jargons in Japanese medical institutions. In fact, many of the medical personnel so often use such technical terms and jargons particularly borrowed from the German language, which had had a great influence on Japanese academics since Japan opened her door to the world in the 1860s.

Those jargons are sometimes arbitrarily deformed in order to apply them to the Japanese phonological system, and, as a consequence, their original form, i.e., their etymology, cannot be recognized even by those who use such words everyday. By means of putting such 'inconceivable' jargons in use, then, the medical personnel have succeeded in keeping patients and their family members away from the confidential conversations in hospitals.

The present study scrutinizes some of the best-known and most-frequently-used medical jargons in Japanese hospitals borrowed or coined from German words focusing on their etymology, their usage and their word-formation. This paper is an introductory study of this kind, and we also aim at further researches as follows: 1) to make a complete list of in-hospital jargons in Japan, 2) to research the familiarity and frequency of those jargons and their etymological knowledge through questionnaires, and 3) to analyze the data, i.e., to compare of the data between institutions and between wards in a particular hospital.

Keywords: in-hospital jargons of German origin, loan words, coinage, lexicology

江藤裕之(えとう ひろゆき)
〒399-4117 駒ヶ根市赤穂1694 長野県看護大学
0265-81-5138 (Fax 兼)
Hiroyuki ETO
Nagano College of Nursing
1694 Akaho, Komagane, 399-4117 Japan
e-mail: heto@nagano-nurs.ac.jp